

江戸前期に徳川將軍に謁見したドイツ人旅行家博物学者のエンゲルベルト・ケンペルが書いた『今日の日本』を昨年、九州大学院言語文化研究のヴォルフガング・ミヒェル教授が初めて分析、原文のまま紹介した。大英博物館・図書館に残る資料を精査して浮かんだ、知られざるケンペル像を寄せてもらった。

ヴォルフガング・ミヒェル
(九州大学院教授)



46年ドイツ・フランクフルト生まれ。フランクフルト大卒。74年来講日、九州大外国人教師。助教授を経て、95年から現職。東西文化交流史、医史学、薬史学。

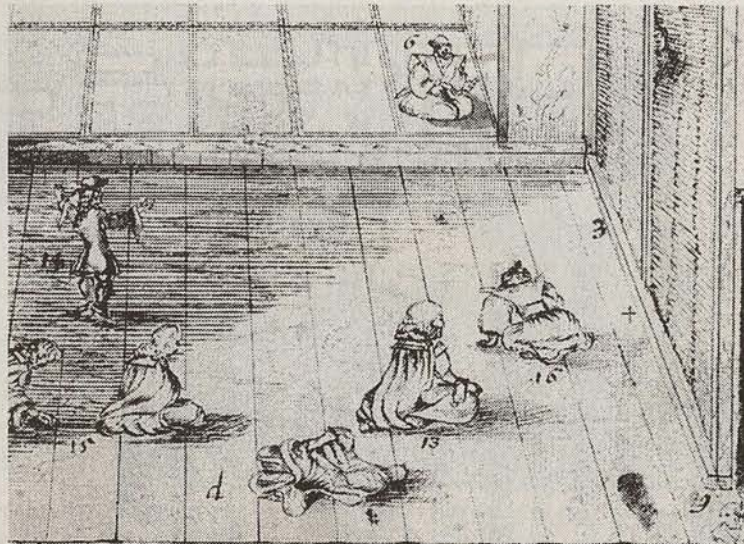
定めて来たような印象を受ける。しかし大英博物館のケンペルが残した書簡や日誌、覚書などにあたる、違う姿が浮かぶ。ケンペルは親族などの援助を受けて五つの都市の学校に通い、23歳でようやく大学へ進んだ。登録は法學だ

につけていた。困難な状況への忍耐を持ち、窮屈な出島でも楽に暮らせた。また貧しい者として下働きを経験し、高慢さもなかった。17世紀後半に日本へ来たヨーロッパ人の中でケンペルは最高の条件を備えていたのである。

江戸の旅人ケンペルに隠れた素顔

5代將軍綱吉の求めに応じ、ヨーロッパの踊りを披露したケンペルの内心は複雑であったに違いない。後に「猿回し」や「茶番劇」などと皮肉っぽく評している。続いてヨーロッパ人の酔っ払いの真似をし、貴婦人の手に接吻する方法を示し、さらにはアリアを歌った。しかし苦々しい思いをしながらもケンペルは江戸城の白書院で両手を広げて踊る姿を、挿絵用に実に丁寧にスケッチしている。彼らにとって江戸城での謁見こそが東方への長い旅の頂点だったからである。

北ドイツの地方都市レムゴの貧しい牧師の息子だったケンペルが、江戸参府でできるヨーロッパ人は年に2、3人だけの、地の果ての国で、「皇帝」の前に迎えられたのである。謁見の様子をせひとも読者に紹介したかったのだ。將軍が御簾の向こうに身を隠していたのと同様、この国もまたヨーロッパ人の視線を避けていた。2年の日本滞在で秘密のペールを開いたことは驚異で、それを誇りに思うのはもったものである。



江戸城の白書院で踊るケンペル。綱吉は右側の御簾の奥にいる／ケンペルのスケッチ、大英図書館蔵＝ドイツ語版のケンペル『今日の日本』から

冷静な観察力育てた恵まれぬ境遇

『今日の日本』を分析、独語原文で紹介

『今日の日本』の草稿や資料をもとに、ケンペルの死後1727

32歳でスウェーデン王の使節団秘書官として、モスクワ、バクー

が知っていたことは間違いない。彼は敬愛され、多くの人が目を瞑っていたのだらう。

年に出版された『日本誌』はすでに有名になった。日本研究者は、この本を手がかりにした。ケンペルの記した、厳しく統制され、外界から隔絶し、それでいて充足した日本の社会は、シーボルトの時代までヨーロッパの日本像形成に大きな役割を果たした。

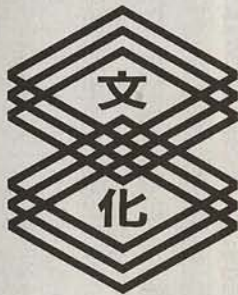
ペルシヤのオランダ商館に、東インド会社への就職を頼んだが断られた。手を尽くしてようやく雇われ、バタビアに着いて、病院の院長を志願する。落ち着いて資料を整理し、原稿を書き、東南アジアの植物を研究するつもりだった。しかし大卒でなく、正規の採用でなかったため、落ちたようである。

ケンペルは外界の分析を好む冷静な人物だった。もちろん彼は本当の意味ですべて客観的ではなかった。しかし、彼以前の著者よりも、先入観なく観察した。日本の必要ならば厳格な政策で守られる平和な社会や、そこに住む勤勉な人々の生活についての草稿の背景に、戦乱と宗教的対立に悩むヨーロッパの現実があったようだ。

ケンペルの先駆的業績は、ごく最近まで特別の先見の明や卓越した才能によると説明されてきた。彼はヨーロッパから日本へ目標を

またも挫折した彼の目は、ようやく日本に向く。かつて出島商館長を務め、日本に関心を持つ人物たちと交流する。ペルシヤで親交があった東洋学者で商人のデ・ヤールが、日本で入手を希望する資料や質問のリストを作成し、中国人が日本向けの漢訳を添えた。

帰郷後ライデン大学から医学博士の学位を授与されたが、私生活は恵まれなかった。17年後ようやくペルシヤを中心にした『廻国奇観』は印刷されたが、日本についての膨大な原稿は生前は出版されなかった。学者としての彼は時代よりもずっと先を行っていた。彼の書簡に見られる心の動きや異文化に対する反応は著作からはほとんど感じられない。驚きや感動などの感情の乏しさは冷静な観察力の代償だったのかもしれない。大英博物館のケンペル資料は今後も多くの驚きをもたらすだろう。



エンゲルベルト・ケンペル 1651～1716年。元禄3(1690)年秋、長崎出島商館付医師として来日。江戸参府の紀行文は、各地の自然、風俗を鋭く観察し、日本人と社会を客観的に描写した。日本コレクションは大英博物館の重要な資料となった。

「集中コース」を終了していた。これまで長い旅の間、偶然によって押し流されるさすらいの旅人であった。しかし今すべてがひとつ

なかつた。学者としての彼は時代よりもずっと先を行っていた。彼の書簡に見られる心の動きや異文化に対する反応は著作からはほとんど感じられない。驚きや感動などの感情の乏しさは冷静な観察力の代償だったのかもしれない。大英博物館のケンペル資料は今後も多くの驚きをもたらすだろう。

博士として来日。江戸参府の紀行文は、各地の自然、風俗を鋭く観察し、日本人と社会を客観的に描写した。日本コレクションは大英博物館の重要な資料となった。

なかつた。彼は7年かけて多くの国々を旅し、様々な文化を経験し、観察し、比較する方法を身

なかつた。学者としての彼は時代よりもずっと先を行っていた。彼の書簡に見られる心の動きや異文化に対する反応は著作からはほとんど感じられない。驚きや感動などの感情の乏しさは冷静な観察力の代償だったのかもしれない。大英博物館のケンペル資料は今後も多くの驚きをもたらすだろう。